

エッセイ 古本屋の仕事場

## 挿絵画家・中一弥さんのこと

橋口 侯之介（誠心堂書店）

二〇一五年十月末のこと、挿絵画家・中一弥なかかずやさんの訃報に接した。満百四歳とのことだった。池波正太郎の『鬼平犯科帳』や『剣客商売』などのほか、村上元三、海音寺潮五郎、藤沢周平らの時代小説の挿絵でよく知られていた。九十歳過ぎてでもご子息の逢坂剛さんの『重蔵始末』（講談社刊、左図）をはじめ、乙川優三郎氏の新聞小説「麗しき花実」などにも描いていて健筆だった。



小説の挿絵は新聞や雑誌などに連載されたさいに掲載されるが、単行本になると省かれてしまうことが多い。まして文庫本だとまず挿絵が入ることはない。文学書は初版本が珍重されるが、わたしは初

出の雑誌や新聞のほうが作家と挿絵画家のコラボが生きていて、むしろ価値があるように思う。ところが、それを手にする機会は少なく、雑誌はバックナンバーを探せばなんとか見られるが、新聞の連載小説は縮刷本では味気なく面倒である。切り抜きしたスクラップ・ブックがときどき古書の中に出てくることもあるが、あまり人気がない。つくづく小説の挿絵の地位が低いように思えるのは残念なことである。

中さん（あえてそう呼ばせていただく）は、「安定した構図と丁寧な考証」（乙川優三郎「朝日新聞」二〇一五年十一月六日、文化・文芸欄）と評されるように、時代考証のしっかりした画風が持ち味だったことは有名である。しかし、和本や古地図の収集家だったことまでは案外知られていない。

元禄には元禄の時代の着付けや髪型があり、江戸時代後期には後期の人物像や風俗があることを、当時の和本を材料としてよく研究されていた。そのための資料の収集がこうじて、いわば和本コレクターになられたのだ。その糧が挿絵の中の人物や何気ない道具の図にいたるまで徹底されたのだった。

集め始めた昭和二、三十年代は、珍しい本が良く出てきた時代だった。旧華族などの家から良品が沽却された一方、熱心な収集家も多かったため、善本・稀本の売買が熱っぽく繰り返り広げられていた。作家では江戸川乱歩がそんな収集家の一人だった。

中さんは、欲しい本があると金に糸目をつけずに手に入れたがる質だったようだ。数万円、高いものは三、四十万円も出して集めた和本

は、第一級品ばかりだった。昭和二、三十年代のこの価格は相当に高い。そのために画稿料をそっくりつきこんでしまい、神保町の質屋に通ったこともあったという『挿絵画家・中一弥』。平成十五年、集英社新書九十二歳のときの聞き書きを末國善己氏が構成したもの。さぞご家族のかたもご苦労されたのではないだろうか、と思いきや、逢坂剛さんも大の本好きになって事務所を神保町に置くほどだから、こりたりはしていなかったようだ。

「目の前の本が何百年の間、代々の持ち主に大事にされていき続けた。人の命は百年足らずだが、この本は何百年愛され続けてきて、今も人の目を楽しませてくれる、それが面白くて」（『挿絵画家・中一弥』とおっしゃる中さんが、さかんに和本を収集されていたとき、わたしはまだ店に入っていない時代だった。

私がお中さんのお宅に出入りするようになったのは、昭和五十年代後半からで、その頃から集めてきた本を毎年少しずつ売却し始めた。こうした和本類が最も高価に取引される東京古典会の「古典籍展観大入札会」に出品していたのだ。東京古典会というは、東京の古書業者の内、和本などを扱う三十店ほどでつくる市場の運営団体で（誠心堂書店も加盟している）、それが年に一度、十一月中旬に一般向けに大きな市を開く。ここに出品できるのは業者だけなので、うちの店が代理となつて中さんの本を毎年いくつか出してさしあげたのである。

その準備のために、夏になると練馬区氷川台のお宅にお邪魔して本の目録取りや撮影をした。おかげでめつたにお目にかかれない第一級

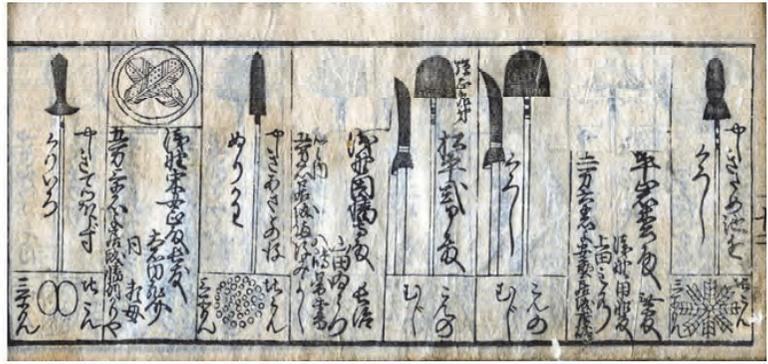
の和本を中さんの解説付きで手にとることができた。なにしろとめどもなく本にまつわるいろいろな話が始まって、時間が経つのを忘れるほどだった。これはとても勉強になった。

中さんは、江戸時代の風俗にかかわるものをまんべんなく集めた。とりわけ、西鶴本をはじめとする浮世草紙が得意だった。地誌も菱川師宣が挿絵を描く『江戸雀』、『奈良名所八重桜』から始まって各地のものをよく集めた。古地図の収集も熱心で、中でも江戸図は圧巻だった。そのほか絵入の随筆や歴史書、風俗関係書などを幅広く涉猟されていた。しかも、いずれも保存程度や刷りの良い美本ばかりだった。

それらを帙に入れてその題簽に自ら書名と刊行年を書いて、「福寿」の蔵書印を捺した。それらが家中に所狭しと収納されていた。おそらく中さんの遺品の中に「自分で作られた蔵書目録があつたはずである。意義のある目録なので大事にしてほしい。」

中さんの応接室には畳二枚分の、つまり一坪の大きさの板が立てかけてあって、そこに江戸図をいっぱい広げて掛けることができた。わたしの仕事は、その地図の写真撮影で、照明をしつかりあて、三脚に固定した一眼レフカメラでモノクロのフィルムを用いて撮った。書籍も見せ場になるような挿絵の箇所を開いて何枚か撮影する。撮った写真は紙焼きにして「古典籍展観大入札会」の目録に用いた。

この入札会での出来高はよかった。バブル経済が始まった時期でもあったので、人気が集まったのである。とくに西鶴本は格別だった。買った値段より二桁多いものもあつた。



大阪生まれの中さんは、絵だけでなく商売も上手だったということでもあろうか。無理をしても集めるときは集め、じゅうぶんに血となり肉となつたら、今度は値打ちを知っている当人が元気な内に気持ちよく手放すというのは、うまい方法である。

優良品は古典籍展観大入札会に出し、それ以外は東京古典会の通常の市に出品してさしあげたが、上等なコレクシオンだったからほとんどが良い値になつたことはいうまでもない。わたしたち古本業者にとつても気持ちの良い商売だった。

最近、その中さんの旧蔵書を再び入手する機会があつた。延宝三年（一六七五）刊『懐中新改江戸鑑』（和泉屋善五郎板）という幕府の名鑑である。江戸時代の中頃からは出雲寺や須原屋茂兵衛が出す武鑑がよく売れたが、この時期のものは珍しい。帙には「福寿」の蔵書印があり、「江戸

鑑」「延宝三年刊」と独特な中さんの字体で書名が書かれている（上図左）。この本には、浅野家老に大石内蔵介の記述がある他、水戸の徳川光圀や吉良上野介など時代劇でお馴染みの人たちが載っている、まさに同時代史料である。

中さんが手放して二、三十年後にもこうして古書市場にまた環流してくるのもありがたいことで、なつかしさが湧いてきた。題簽の文字は十七世紀後半、江戸で刊行された本に見られた文字に似ている。松会や鱗形屋の出したこの時代の本を江戸版というが、その板下の文字には上方本とは違った独自の風合いがあつた。私の好きな書体でもあつた。その雰囲気の中さんは蔵書にも生かした。挿絵の中のさりげない文字にも現れる。

収集をすることで、たかさんの本を見るわけだが、そのおかげで見えてくる世界が変わってくるものである。たとえば、この江戸版と上方版の文字の差は、同じ内容でも本の持つ趣がまったく違ったものになる。それは当時の読者の目線の相違でもある。同じテキストで翻刻された現代の本では、その差がわからないが、オリジナルを見ていると気がつく世界である。それが血となり肉になるということだろう。中さんは徹底した考証に裏付けられた絵を描きたいという動機からここまで和本を集められた。同時に集めた時代がよかつたから熱中できた。これからは、中さんのような人はもう出ないかもしれない。今は全般に本を集めるといふ情熱自体が薄くなっているように思う。でも、まだ可能性はあるのだが……。